

タラノキ新品種「ぐんま春王 NT」の現地適応性

研究のねらい

農業技術センターで育成した「ぐんま春王 NT」は、「ぐんま春王」と同等の収量性とそうか病に対する耐病性を持ち、茎や葉、促成芽（たらの芽）のトゲが細く小さいという特性が場内試験で明らかになっています。

そこで、たらの芽の主要産地5カ所における栽培適性ならびに、たらの芽促成栽培の各作業における、トゲ形状の違いによる作業性への影響について調査しました。

技術の特徴

- 各試験地（表1参照）における「ぐんま春王NT」の採取時の穂木の生育は、穂木長および側芽数ともに「ぐんま春王」並でした。また、試験をした標高130～620mでの生育は、より高い標高での栽培で抑制傾向でしたが、概ね良好です（図1）。
- 茎を直接触る穂木採取～駒木調製までの作業時間について、トゲが大きい「ぐんま春王」とトゲが小さい「ぐんま春王NT」の差は見られませんでした。しかし、ほ場管理～促成芽（たらの芽）の出荷調製までの作業において、「ぐんま春王」では不快に感じる作業場面が多く、特に穂木を直接持って作業する駒木調製作業（写真）で不快感が高くなりました。一方、トゲが小さい「ぐんま春王NT」では、全ての作業でほとんど不快に感じる事がなく、安心して作業ができ、取り扱いやすいことが確認できました（図2）。

表1 主要産地における試験場所の標高

	藤岡	渋川	富岡	利根	吾妻
標高	130m	250m	280m	520m	620m

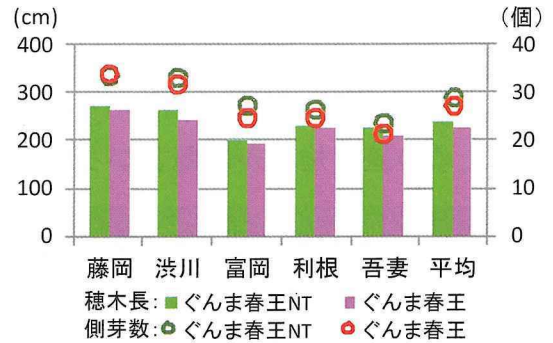


図1 穂木採取時の生育量

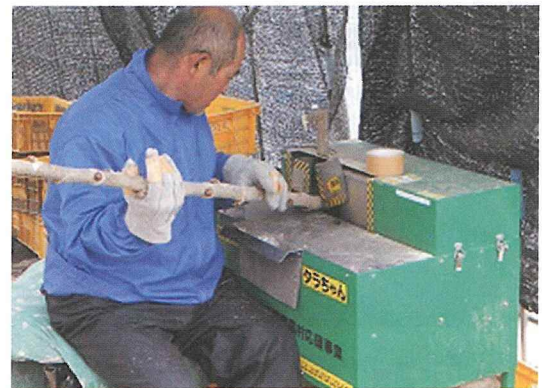


写真 穂木切断による駒木調製作業の様子

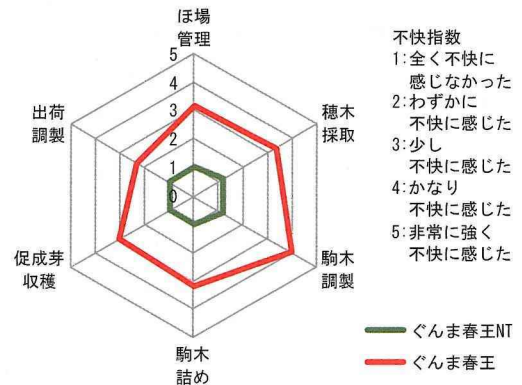


図2 作業における不快程度アンケート結果

今後の取り組み

品種の特性を活かした側芽利用による1年木促成栽培技術の普及を図るとともに、立枯疫病耐性の品種との交配による、病害に強いタラノキの育成を検討します。

（執筆者：篠原 和典）